

「ルーツ」

4月に与論高校に赴任して以来、繰り返し講話や校長通信などの配布物で、「与論島にルーツを持つ自分に誇りを持って」と生徒に伝えている。

先日、ある教育関連企業の人と話していたときにも、「与論島出身なんて、なりたくてもなれないんですよ。だから羨ましいんですよ」と言われ、与論で生まれ育ったこと自体が、それだけで立派な個性であるということを改めて実感した。その個性をどのように表現・発揮するかを生徒には普段から考えてもらいたいという思いから、与論島にルーツを持つことの貴重さ・有り難さを次のような趣旨で生徒に伝えている。

「ルーツ」とは、自分や祖先が生まれ育った土地に対する感情的な結びつき、心の拠り所みたいな感覚といってもいいでしょう。この単語のもともとの意味は植物の「根っこ」ですから、生徒の皆さんが本校を卒業した後、どこで生活することになっても、「根っこ」は与論島にあるという意識を常に持つ大人に成長してほしいということなのです。他の地域とは明確に異なる自然や文化が色濃く残る、一島に一枚しかないこの与論高校でしか受けられない教育コンテンツをフルに活用して、「日本人」というよりはむしろ「与論人」としての自我を確立してほしいと思います。都会より地方が、集団より個が何をするのが問われる時代になっています。そういう意味では、与論高校の生徒には追い風が吹いているといってもいいでしょう。小規模校であることを逆にとり、大規模校の生徒が経験できない、与論だからできること、与論でしかできないことを前のめりの姿勢で経験して、自分たちの存在価値を高めてほしいのです。本校は生徒個々がオンリーワンの存在になりやすい学校なのだということを忘れないでください。

両親は喜界島出身だが、私は東京で生まれ、大学卒業まで生活した。そして1991年4月、鹿児島県で教師生活をスタートさせた。バブル全盛の時代、大学の友人たちが羽振りのいい東京の民間企業の内定を5つも6つももらっている中、どうしてわざわざ田舎で教員なんかするのかと不思議がられた。3校目の赴任地が大島高校、6校目の赴任地が喜界高校だった。喜界島にある先祖のお墓参りを繰り返すうちに、自分のルーツを初めて強く意識するようになった。「大島高校（母の母校）、喜界高校（父の母校）で両親がどんな思いで勉強していたかを想像しながら仕事をしなさい。そして今を生きる島の高校生たちをよろしく頼む」と先祖から言われている気がした。自分のルーツを意識することが、自分の仕事にやりがいや誇りを持たせることをこの時初めて知った。

8校目の赴任地として今、与論高校にいる。喜界島の先祖の知り合いに、与論出身の方がいらしたのかもしれない。その先人たちの想いに応えられるよう、職員とともに日々生徒たちと格闘している。